

## 「探偵はBARにいる2 ススキノ大交差点」★★★★

2013（平成25）年5月16日鑑

賞<梅田ブルク7>

監督：橋本一

俺（探偵）／大泉洋

高田（俺の相棒兼運転手）／松田龍平

河島弓子（バイオリニスト、依頼者）／尾野真千子

マサコちゃん（ショーパブで働くオカママジシャン）／ゴリ

椛脇孝一郎（カリスマ的な人気を誇る、反原発派の二世議員）／渡部篤郎

松尾（北海道日報の敏腕記者）／田口トモロヲ

フローラ（ショーパブ「トムボーイズ・パーティ」のママ）／篠井英介

学生（ファッションヘルス「ちんギッス・ハアヘン」の客引き）／近藤公園

新堂艶子（椛脇孝一郎の後援会長で椛脇陣営の影の女帝）／筒井真理子

野球男（マスク集団のリーダー）／矢島健一

大畑（BAR「ケラー・オオハタ」のマスター）／榎田徳寿

佐山（花岡組系「則天道場」の元副長）／波岡一喜

桐原（ヤクザの組長）／片桐竜次

相田（椛脇と因縁の深いヤクザ・桐原組の若頭）／松重豊

ヒロミ（ショーパブ「トムボーイズ・パーティ」のホステス）／佐藤かよ

トオル（ショーパブ「トムボーイズ・パーティ」の元ホステス、マサコちゃんの弟的存在）／富田佳輔

源ちゃん（風俗街の客引き）／マギー

モツ（風俗街の客引き）／徳井優

2013年・日本映画・119分

配給／東映

### <ススキノを知れば知るほど、本作が身近に・・・>

一時期数年間続いていた某団体における北海道の札幌を中心とした2泊3日のゴルフ・競馬ツアーが中止された後、私はしばらく札幌へ行く機会がなかったが、昨年秋からは弁護士として札幌での事件を受任したため、今年5月以降札幌へ行く機会が増えることに。札幌といえばススキノ。お昼の裁判所周辺のススキノには魅力はない（？）が、夜のネオンが灯り始めるとススキノのまちは一気に魅力いっぱいになってくる。そんなススキノを知れば知るほど、本作が身近に・・・。

前作『探偵はBARにいる』（11年）も結構面白かった（『シネマルーム27』54頁参照）が、その公開1週間後に「パート2」の製作が決まったというのは今ドキ珍しい。『探偵BAR』シリーズは、BAR「ケラー・オオハタ」を根拠とする探偵の俺（大泉洋）と、もっさりしているが格闘能力抜群の相棒・高田（松田龍平）とのコンビの味が生命線。16作まで続いた勝新太郎と田宮二郎が名コンビを組んだ『悪名』シリーズには遠く及ばないだろうが、「ススキノ大交差点」のサブタイトルどおり、ススキノの夜のまちなを真正面に打ち出したシリーズ第2作の出来は・・・？

### <ススキノのどこが舞台に？ストーリーの核は？>

本作では、ススキノにある俺の馴染みのショーパブ「トムボーイズ・パーティ」が主な舞台になる。また、本作の核となる人物は、そこで働いている俺の仲良しのオカマ・マサコちゃん（ゴリ）だ。努力家のマサコちゃんは趣味として始めた手品の腕があれよあれよという間に上達し、ついには全国大会に出場して優勝してしまったから、すごい。もっとも、それだけなら誰もが羨むサクセスストーリーだが、その直後にマサコちゃんが何者かによって殺されてしまったからさあ大変だ。

一躍有名になったマサコちゃんが被害者だから犯人の逮捕は時間の問題と思われたが、意外にも警察の捜査は難航。そこで、ススキノのまちなことは警察より俺の方がよほど詳しいと自負する俺が犯人捜しに乗り出したわけだが、その動機はマサコちゃんとの友情や義侠心だけ？いやいや、それはない。なぜなら、きっと探偵は弁護士以上に不安定な職業だが、探偵が職業として成り立つためには金を払ってくれる依頼者が必要だからだ。前作では、BAR「ケラー・オオハタ」にかかってきコンドウキョウコと名乗る女性からの電話による依頼によって俺の活動が始まったが、さて本作では？

### <ヒロインは大阪弁！というより岸和田弁？>

前作では西田敏行扮する短足・寸胴のオッサンが、何とも不似合いな八頭身美人の若い沙織（小雪）を嫁にもらったことの報い（？）として殺人事件が発生したが、マサコちゃん殺害事件を探偵の俺が調べ始めると、何者かが逆に俺を付け回してきたから俺は不愉快。そこでこいつをエレベーターの中でとっつかまえてみると、何とこれが女だったからビックリ。しかも、高田と一緒にいろいろ調べていくと、この女・河島弓子は有名なバイオリニストで、生前のマサコちゃんは彼女の大ファンとして多くのCDを持っていたから更に驚きだ。

本件のヒロイン・弓子を演ずる尾野真千子は、現在開催されている第62回カンヌ国際映画祭のコンペ部門で審査員を務めている河瀬直美監督の『萌の朱雀』（97年）で主演デビューした美人女優。再び河瀬監督とタッグを組んだ『殞の森』（07年）ではカンヌ国際映画祭グランプリを受賞した。河瀬監督の秘蔵っ子だったが、NHKの朝ドラ『カーネーション』でコシノ三姉妹の母親・小篠綾子を岸和田弁で演じたことによって、一躍全国区になった。バイオリニストといえば普通は上品な淑女というイメージだが、ジャズシンガーに大阪弁の綾戸智恵がいるように多少ガラの悪い大阪弁のバイオリニストがいても不思議ではない。弓子がしゃべる大阪弁を聞いていると、「こりゃ大阪弁ではなく岸和田弁」と思ってしまうのは『カーネーション』の残像かもしれないが、本来おしとやかな美女である（？）尾野真千子が、本作では俺や高田のキャラに合わせて（？）面白い味を出している。もともと本作に芸術性を期待しているわけではないから、ススキノに岸和田弁のヒロインを出没させたのは一興かも・・・。

### <俺の聞き込みは？その反応は？事件解決の糸口は？>

マサコちゃんの死後しばらく女狂い病（？）に侵されていた俺が聞き込みを開始したのは、まず①マサコちゃんが働いていたショーパブ「トムボーイズ・パーティ」のママ・フローラ（篠井英介）やホステスのヒロミ（佐藤かよ）たち。続いて、②風俗街の客引きをしている源ちゃん（マギー）、学生（近藤公園）、モツ（徳井優）たちだが、仲間だったはずの彼女や彼たちの口はなぜか今はひどく重い。マサコちゃんの死後、捜査を警察にまかせて女に狂っていた俺にも責任はあるが、そこまで口を閉ざすのは何かがあるはずだ。

そんな俺の推測どおり、新聞記者・松尾（田口トモロヲ）の話によると、マサコちゃん殺しの背後には、道内でカリスマ的な人気を誇る反原発派の政治家・椛脇（とちわき）孝一郎（渡部篤郎）が絡んでいるらしい。椛脇はその筋では有名な「両刀使い」でその昔マサコちゃんと愛人関係にあったそう。手品の全国大会に出場したおかげで、マサコちゃんが一躍有名人になったため、選挙直前の大事な時期に過去の関係がバレるのではないかと恐れた椛脇がマサコちゃんを闇に葬ったに違いないというわけだ。さらに、フローラからの情報によると、マサコちゃんが弟のように可愛がっていた元ホステスのトオル（富田佳輔）が事件以来行方不明になってるそうだが、これもひょっとして椛脇のせい？

そう考えた俺は高田が運転するオンボロ車に乗ってトオルの出身地だという室蘭まで調査に出かけたが、なぜかその車の後部座席には河島弓子を乗せていく羽目に。有名なバイオリニストの割には「もうバイオリンには飽きた」などと、言うことは自由奔放だが、この女にはきっと何か奥に秘めた秘密がありそう。さて、室蘭での聞き込みによって、俺は何らかの事件解決の糸口を発見することができるのだろうか。

### <アクションの冴えはやはり悪名コンビの方が・・・>

5月15日に観た『殺人の告白』（12年）は韓国風の3つのアクションシーンが「売り」だったが、洗練度から言うと、やはり『007』シリーズや『ボーン』シリーズの方が・・・、という感じだった。そんな目で本作を見ると、本作は俺と高田が共闘する面白いアクションシーンが明らかに前作より増えている。その第1は、札幌名物として有名な市電内におけるマスク集団とのアクション。第2は、スプリンクラーが作動することによって水浸しになったショーパブ「トムボーイズ・パーティ」内での、同じくマスク集団とのアクションだ。マスク集団のリーダーはやたらバットを振る回す野球男（矢島健一）だが、こんなバットで頭を思い切り殴られたら、たちまち失神、下手するとそのまま脳震とうで死んでしまうかもしれないはずだが、何と高田は「ああ、痛かった。ちょっと油断しちゃった」と言いながらすぐに復活してくるから面白い。いつも約束の事件にちょっとだけ遅れてくるため、俺がいつも窮地に立たされるのが相棒として少し不満だが、この男が頼りになることはまちがいない。

そんな視点からは、俺と高田がぴったり息を合わせた本作のアクションシーンは十分満足できるものだが、そのキレや洗練度からいうと、やはり「悪名コンビ」の方が・・・。

### <この秘密は戸籍を調べればすぐにわかるが・・・>

『探偵BAR』シリーズは、俺や高田のキャラそして毎回登場してくるはずの美人ヒロインのキャラなど、「北の大地」を舞台とした面白い要素が持ち味だが、「探偵もの」としての謎解きやミステリー性はしっかり確保しておく必要がある。なぜなら、それがなくなれば単なるアホバカバラエティーと同じになってしまうからだ。しかして、本作のそれはマサコちゃん殺しの犯人捜しだが、俺が椛脇の事務所へ乗り込み、椛脇と対決してみると、「確かにマサコちゃんには会ったが、俺はマサコちゃんを殺していない」という椛脇の発言は信頼できそう。本作に見る椛脇のキャラは、一方では「ルーピー」と言われた某元総理（の若い頃）を彷彿させるし、他方では「これぞ現代のケネディ大統領」と思わせる理想のリーダー像とも受け取れるが、渡部篤郎の熱演にもかかわらず、いかにもとってつけたような感じは否めない。それはともかく、椛脇がマサコちゃん殺しの犯人でないとするれば、真犯人は一体ダレ・・・？

それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、本作はその点の謎解きやミステリー性が少し薄弱だ。むしろ、本作の謎解きやミステリー性は、なぜ弓子が執拗にマサコちゃん殺しの犯人を追うのかという点で発揮されるので、それに注目！椛脇の反原発集会に弓子がナイフを持って潜入するという設定は少しお粗末だが、なぜ弓子はそこまでしてマサコちゃんの復讐を果たそうとしたの？本件のラストに向けては、その意外性をしっかり楽しみたい。もっとも、弁護士は職務上必要ある時は戸籍謄本を請求することができるし、マサコちゃん殺しを捜査した警察も当然マサコちゃんの戸籍謄本を調べているはずだ。それを考えると、その点においても、本作の謎解きとミステリー性は少しお粗末だと思うのだが・・・。

2013（平

成25）年5月20日記